

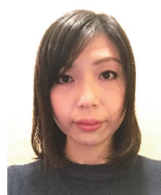
愛と情熱(=変態性)にみるモノづくりの真髄

The soul of craftsmanship in love and passion

藤田 弥世

FUJITA, Hiroyo

京都大学大学院教育学研究科教育科学専攻博士後期課程 1 回生
京都大学デザイン学大学院連携プログラム 1 期生



1 テーマ18を選択したきっかけ

昨年度から参加者として参加しているサマーデザインスクールで今回、テーマ18「文化的な視点の発見と知的好奇心による図鑑」ⁱ⁾に参加しようと思ったきっかけは、そのタイトルでした。私の研究テーマである「文化」と、好きな「図鑑」の組み合わせ、この時点で既に心に決めたところはありませんでした。そこから更に概要に目を移し、実施者が中小路先生であることに気付いた瞬間、昨年行われた香港でのワークショップⁱⁱ⁾が脳裏をよぎりました。当時、中小路先生の班の発表に感銘を受け、先生主導のワークショップに一度は参加してみたいと考えたものです。それが今回、自分が気になったものが全て凝縮されているということで、これは参加するしかない！と飛び込んだのでした。

2 最優秀賞受賞に至った3要因

3日間にわたって行われたワークショップの基本的な枠組みとしては、図鑑作成に必要な知識のレクチャー後は従来のワークショップと同様、ブレインストーミング、アイデア収束、フィールドワーク、アイデア具体化、そして発表の流れでした (pic.1)。ただ一点、私がいつも参加していた課題解決に向けての「提案」をアウトプットとするワークショップと異なったのは、実際に「図鑑」という形あるも



pic.1 アイデア収束場面

ⁱ⁾ 実施者：中小路久美代 京都大学デザイン学ユニット特定教授、川嶋稔夫 はこだて未来大学情報アーキテクチャ学科教授、木村健一 はこだて未来大学情報アーキテクチャ学科教授、山本恭裕 東京大学大学院教育学研究科特任准教授

ⁱⁱ⁾ 平成26年度 京都大学-香港バプティスト大学合同デザインスクール (http://www.design.kyoto-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/hongkong_20140612-15.pdf)

のをアウトプットとして作成するという点でした。

では、基本的な枠組みは従来のワークショップと同じでありながら、なぜサマーデザインスクール最優秀賞を受賞することができたのか。私自身は、まず以下の3点が要因であったと考えます。1) 物事に対する分類の切り口についての考え方を、具体例を用いた実践の中で丁寧に教え込まれたこと、2) 発想やアイデアに対する適度な自由度、3) アイデアを形にすることを可能にした先生方の技術、です。

2.1 第1の要因：物事の種類方法についてのレクチャー

物事をどう分類するかを考えることは、図鑑にとって要となる作業です。何を一つのカテゴリーとして捉え図鑑のテーマとするのか、そのカテゴリーの中に入る物事をどの視点から切り分け分類するのか。これについて、実際にKRPの部屋案内図に使用されている図形を用いて頭と身体を動かしながら学ぶことで、常に分類を意識しながら物事を観察し、発想するという姿勢がつくられたと考えます。

2.2 第2の要因：ワークショップにおける適度な自由度

次いで自由度について、今回、アイデア収束にあたり、関心対象を共有する者同士が2人1組になり、結果としてチームメンバーは3班に分かれましたが、たった6人を3班に分けたことにとても驚きました。結局、各班がそれぞれ別々の図鑑を作成する結果となりましたが、先生方が無理に一つの図鑑・一つのプロセスにまとめず、各班の個性を尊重してくださったことが、良い結果につながったと考えています。一方で、各班が完全に独立して作業しないよう、要所要所にミーティングを設けたことにより、チームとしての連帯感も保てたと思います。また、議論が停滞してくると、さりげなく「こうすればどうか」という道を示してくださったことで、隘路に嵌まり込むことなく次のステップへ進むことができました。これが後の『愛と間合い』班によるレゴ大撮影大会へと結び付いていくのですが、それはまた3.1節にて詳細を語ります。

2.3 第3の要因：図鑑をつくりあげる技術力

大撮影大会によって進り溢れ返った『間合い』への愛と情熱を図鑑という形に押し込むにあたっては、木村先生の技術力に支えられました。堰を切った変態性の暴走により図鑑としてあるまじき文量となった迷作を欠片も溢さず、限られた時間にも関わらず妥協を知らない変態たちに文句も言わず、図鑑の中にぎっちり詰め込んで下さった木村先生の技術力と寛大なお心に、どうだこれが仏だと誰にともなく呟きたくなったことは内緒です。このように、写真撮影や図鑑として形にするといった実際に手を動かす作業は、先生方の技術力があっ

てこそでした。

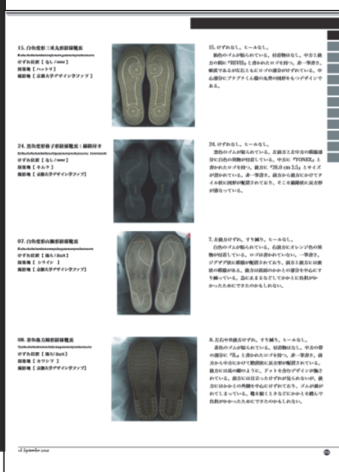
こうして出来上がった3種類の図鑑（導入部）は、それぞれのメンバーの変態性がみっちみに詰まった世に類なきマニャック図鑑として、サマーデザインスクールという表舞台で日の目を見ることができたのでした（pic.2）。

3 ワークショップで学んだこと

あの3日間を改めて振り返ってみるに、思い起こすのは2日目から3日目にかけて、それはまるで朝顔が朝日の中でふるふると花卉を開かせるように、メンバーそれぞれが何がしかの形で図鑑への変態性を遺憾なく醸し出していった、不可思議な空間です。私自身は、一度集中するとピリピリして兎に角きっちりしようとしがちなため、こうした濃密でしっとりした、良い意味で自由度の高い空間を黙って支えて下さった先生方のサポート姿勢は本当に勉強になりました。また一方で、ただ見守られるだけではなく、粘り強く妥協しない発想への拘りの姿勢についても、非常に勉強になりました。早く議論を収束させて終わらせようとするメンバーに対し、もう少し考えるようにと誘導していた中小路先生のお姿は今でも印象に残っております。

3.1 適度な自由度にかかるワークショップでの思い出—変態性の発露—

先生方にいただいた沢山のご助言について、2.2節でも少し触れましたが、今でも鮮明に思い出せることがあります。私の班は『愛と間合い』というタイトルの図鑑を作成しましたが、元々は愛と間合いの組み合わせではなく、影と間合いの組み合わせでした。間合いのとりかたによって影がどの程度重なるかを見ることにより、間合いをつくっている人たちの関係性を図鑑にしようという試みです。しかし、影は光によって如何様にも変わります。それをどう定義するのか。また、図鑑に載せる「間合い」の写真をどうするか、フィールドワークで撮った見知らぬ他者の写真を採用するわけにはいけません。この2点を悶々と悩んでいると、山本先生からレゴはどうかとご助言をいただきました。この一言が、“レゴ大撮影大会@愛と間合い班”へとつながったのでした。こうした撮影に造詣の深い川嶋先生によって撮影舞台が整えられ、フィールドワークで撮影した写真とそこから漂う関係性を忠実に再現できるよう、ディレクターよろしくレゴをせっせと組み立て並べる作業はのべ5時間超に及び、夜独特の高揚感とレゴという大人も子供も夢中になれる道具があいまって、図鑑への愛と情熱という変態が交じりあう不可思議で濃密なひと時となりました（pic.3）。なお、随所に散見する変態というワードは、一つのことに愛と情熱のすべてを傾けて集中す



pic.2 各グループ完成版図鑑

ることを表すさまとして山本先生からいただいた、愛と情熱を一括りにできる利便性の高い誉れあるお言葉でありますこと、ご安心ください。

また、その撮影を通じて影という視点を切り捨てる決断もできました。これは、思い入れのある発想にはしがみついてしまうものを、時には切り捨てることも必要であることを学ぶよい機会となりました。

3.2 初めての牽引役実践体験

この3日間で私自身、学んだことは他にもたくさんあります。前述の通り、今回のワークショップは2人1組に分かれての作

業でしたが、私のペアはワークショップの経験がない学部生の人でしたので、参加者でありつつマンツーマンの班を牽引するという、滂沱の冷や汗を流す貴重な経験をすることができました。右も左もわからない学部生を誑かす、もとい、最終日の発表までに図鑑が完成するようペース配分を考え、発想を共有し、アイデアを出しては取捨選択をして…と、間違いなくこれまでのワークショップで最も頭をフル回転させたと自負しております。では今まではどうだったのかと言われますと、それはまたシナプスと神経回路の話題の時にお話ししましょう。こうして逃げ場のない中、やはり2日目に解き放たれたペアの人の変態性に押しつ押されつ、気付けば1日は24時間ある！と考えてしまっていたあたり、ペース配分は完全に失敗しました。ともあれ、今回のワークショップは、お互いの発想を大事にしながら、限られた時間の中で成果を出すために何をどこまで取り入れるのか、作業分担はどうするかなど、牽引役の立場から実践できた非常に貴重な機会となりました。



pic.3 レゴに真摯に向かう大人たち

4 (愛+情熱)=変態性にみるモノづくり

最後に、私たちのチームは他のテーマの人たちが作業していた会場とは異なる場所で作業していたため、他の方たちがどのようなことをしていたのかは最終発表で初めて知ることが出来ましたが、どのチームも非常に面白く、とても魅力的でした。正直に申しまして、私は自分のチームが最優秀賞をもらえると

は全く考えておりませんでした。そんな中、チームが最優秀賞を受賞できた要因は何だったのかを考えながらこの原稿を書き、先に3点挙げましたが、最後に一つ大きな要因としては、自分たちがどれだけ変態性を発揮しきれたか、という点ではないかと考えます。知識・サポート・技術、どれも決して欠けてはならない要素ですが、作り手全員が、自分たちが生み出す物に対し自身が持てる全ての愛と情熱を注ぐ全力の変態になりきらねば、結局出来上がったモノはただの物質で終わるのではないかと思うのです。

私はこれから長い時間をかけて、変態性を遺憾なく迸らせながら自身の研究活動に邁進していくのですが、一分野だけに傾倒するのはただの変態です。デザイン学に籍を置く身としては、十字型人材を意識しながらどれだけ色々なことに注力できるか、マルチ・ザ・変態として様々なポイントに全力で愛と情熱を注げる人間でありたいものだと思いを馳せつつ、これを締めくくります。

「デザイン学」への問い

- + アイデア取捨選択の基準とは何か
- + 変態性を発露出来る環境とは何か
- + 異分野との融合はいかになそうるか